

氏名（本籍地） 相澤徳久（宮城県）
 学位記および番号 歯学博士，乙 第242号
 学位授与の日付 平成18年3月10日
 学位論文題名 「学童の身体発育からみた永久歯萌出と齲蝕罹患に関する歯科保健学的解析」
 論文審査委員（主査）鈴木康生教授
 （副査）宮澤忠蔵教授
 伊藤一三教授
 横瀬敏志教授

論文の内容および審査の要旨

本研究では、小学校1年生から6年生までの経年的調査から、身体発育、永久歯萌出状態、齲蝕有病状態の関連性を総合的に分析するとともに、学童期小児の効果的な齲蝕予防の指標を見いだすことを目的とした。対象は、郡山市内の公立小学校に平成4年度から7年度に入学した学童で、その後各々6年生までの間、毎年実施されている身体測定および歯科健康診査を継続して受診した男女児373名である。これらの学童の身体発育、永久歯萌出、齲蝕経験（DMFT指数、DMF歯率）についてコホート調査を行い、以下のような結果を得た。

身体発育の各項目のうち、男女児とも身長が正規性が高く、また全国平均にほぼ一致した集団であったことから、身長を身体発育の指標とすることとし、1年生時の身長の平均値±1σで3群に分けて、L群、M群、H群とした。

1. 身体発育（身長）と永久歯萌出について

上下顎いずれの歯種も女児の方が男児より萌出が早い傾向にあった。また身長と永久歯萌出歯数との関係では、男児では身長の高い群の順に萌出歯数が多く、正の順位性が認められた。一方、女児ではその傾向は認められなかった。

2. 身体発育（身長）と齲蝕経験について

身長各群の6学年時のDMFT指数、DMF歯率はともに群間に有意な差は認められなかった。なお男女児とも3学年時までの罹患歯はすべて第一大臼歯であり、6学年時のDMFT指数も第一大臼歯の占める割合が極めて高かった。

3. 身長各群にみた「萌出学年別6学年時の全DMFT指数の推移」および「累積萌出者率」の両者において統計学的に有意差を認めたのは、いずれも上顎歯で、男児では上顎側切歯、女児では上顎第一小臼歯であった。またこれらの歯種については、早期萌出群に高い齲蝕が認められ、第一大臼歯に加えて他の歯種の齲蝕が認められたのが特徴的であった。

以上の結果から、男児、女児それぞれに特徴的な萌出および齲蝕発現傾向を示す歯種が抽出できた。混合歯列期にある学童においては、これらの歯種を指標の一つとして、これに着目した歯科保健学的対応を進めることで、より効果的な齲蝕予防を図る可能性が示唆された。

本論文についての審査会は、平成18年1月11日に行われた。初めに申請者から研究の経緯と内容について説明があった。副査の委員からは、1) 対象集団の身体発育、齲蝕状況の地域性について、2) 上下顎永久歯の萌出時期と順序について、3) 研究結果から得られた指標の再現性について、などの質問があり申請者から適切な回答が得られ、主査からも補足説明がなされた。

また論文内容については、1) 身長各群の平均身長・平均暦年齢を表記する、2) 指標とした抽出された歯種についての第一大臼歯の萌出状況を提示するとよい、3) 上顎歯の萌出に関連して上顎骨歯槽部の発育が下顎と異なることを考察に加えるとよい、等の助言があった。また齲蝕については、齲蝕罹患・経験・有病等、適切な用語を用いるよう指摘があった。これらの指示・助言に基づいて図表の追加、ならびに用語、文章の追加・訂正を行い、後日各委員による確認後、了承された。なお審査に先立って語学試験を行い、合格と認められた。

本研究では、学童期小児の身体発育からみた永久歯萌出、齲蝕の状況が明らかとなり、また効果的な齲蝕予防を図る上での一指標を抽出できたことは意義があり、学校歯科保健ならびに歯科医学の発展に寄与するものと考えられた。また申請者の学識も十分であることから学位授与に値するものと判定された。

掲載雑誌

奥羽大学歯学誌 第33巻，2号 107～120